



Noism1 近代童話劇シリーズvol.2『マッチ売りの話』+『passacaglia』 Photo by Kishin Shinoyama

【批評】

何回も見なければいけない

『マッチ売りの話』+『passacaglia』

Noismが『近代童話劇シリーズ』の第二作『マッチ売りの話』を『passacaglia』と共に初演した。2017年1月20日に本拠地りゅーとびあスタジオBで初日の幕を開け、2月9日からは、彩の国さいたま芸術劇場小ホールで上演した。新潟に戻っての再上演の後にはルーマニア公演の予定もある。日本における創作バレエの初演としては、異例の上演回数だ。

『マッチ売りの話』も金森種の演出・振付を、井関佐和子らNoism1の主力メンバーが踊る中編だった。アンデルセンの童話と別役実が1966年に早稲田小劇場のために書き岸田國土戯曲賞を受賞した不条理劇『マッチ売りの少女』の両方が、金森の舞踊台本の背景となっていた。

《近代童話劇シリーズ》は、第一作の『箱入り娘』もそうだったが、子どもに語って聞かせるとすぐに理解してもらえる童話の舞踊化である『眠れる森の美女』『シンデレラ』『白雪姫』『オンディーヌ』などには出来ていない。『マッチ売りの話』も別役の不条理テイストで濃厚に色づけされていた。論理的に説明したり理解したりしにくい状況の中で、登場人物が意味不明に近い出会いや動きを繰り返した。公演パンフレットに書かれた配役(それぞれの年齢が細かく指定されている)の横に「疑問符の相関性」という(但書きがあり、そこに「少女は老人夫婦の孫である?」「少女は女の20年前の姿である?」「女は娼婦の20年後の姿?」などの「問いかけ」が列記されている。これを読むと、舞台上で演じられている出来事の不可解さがいっ

そう増すことになる。

ストーリーの展開がよく理解できる舞台や小説が、じつは何が起るか先のことは何も判らない世の中の現実と似ても似つかない絵空事であることを、ベケットの『ゴドーを待ちながら』やイヨネスコの『犀』、別役実の諸作品に接してしまった私たちは知っている。それを舞踊でやっているのが金森種の《近代童話劇シリーズ》なのだ。

まず巨大なスカートの上から客席を見下ろす精霊(井関佐和子)の姿を見せる。次いで出演者全員が面をかぶり、凝った作りの衣裳をまとって細かくからだをふるわせたりする動きを見せ、個々の人物を表す。そこで提示されたドラマの断片のひとつひとつは、踊りとして緻密に仕上げられていた。「童話」のバレエ化だったら、かわいそうな少女に焦点があたるはずなのだが、いくら待ってもそのようなことにはならなかった。

精霊が登場して、舞台上に置かれた装置を片づけるように次々と指示を与えると、舞台上はきれいさっぱり。ダンサーたちも面を外し衣裳を変え、抽象的な動きによる『passacaglia』を踊る。前半のドラマの断片を連ねたような『マッチ売りの話』とはまったく別の世界が広がった。観客は、ここで初めて

つながること

すっと立ち、からだをわずかに動かすだけで、観客の視線とところをつかんで離さない。そんな井関さんの「精霊」に導かれ、「マッチ売りの話」がはじまる。

昭和の日本とおぼしき舞台。マッチを擦る少女、夫婦、女、警官…みんな仮面を付けている。仮面によって彼ら・彼女らは、個であって個でなく、誰でもなく誰にでもなる。

穏やかだった茶の間が、訪問者によって乱され、内に秘めた何かがあらわになってゆく。仮面はまた、嘘や沈黙の象徴だ。

少女が火をつけるのは、マッチだけではない。自らと周囲を焼く凶器のスイッチも、彼女の手の中にある。少女は、いつの時代もこの土地でもまっすぐに生きる。それが他者によって歪められた道であっても。

再び現れた「精霊」は、空間を清めるように全身で舞い、別の世界へ観客を誘う。

「モノ」が排除された『passacaglia』の舞台には、仮面をはずし、シンプルな衣裳をまとったダンサーたちだけが、純粹に存在する。私も、意味を探して頭で考えるモードから、全身を開いて感じようとするモードへと切り替わる。

井関さんと中川さんが、ここからからだを共鳴させるように、密接に踊る。視線を交わさないのは、すでにひとつの生命体になっているからだろうか。

他のダンサーたちも、さまざまな組み合わせで踊る。研ぎすまされたからだの動きが生み出す緊張感の中、高く昇華するような美しさと、深く沈むような不吉さがまじりあう時間が流れてゆく。

やがて、取り合った手が離れ、観客へ強く向けられる。何かを突き放したようでもあり、何かを受けとめる覚悟をしたかのようでもあり…。この作品から得たものを、どこへどう返すか、返さないか。今度は観客の手にゆだねられる。

誰かと、何かとつながることには、幸福も軋轢も伴う。それでも、それだからこそ、人はつながることを諦めず、そして、つながることから逃れられない。

安藤貴映子(東京都)

超えていく視覚体験

～Noism1『マッチ売りの話』+『passacaglia』～

「1回ではわからない」や「混乱して下さい」の言葉(金森種)に身構えずにいられた者など皆無だったはずだ。最初に観た時、疑問符が浮かんだのは事実。しかし、繰り返して(正確には6回)観たのは、それを取り扱うためではない。舞踊が雪の「結晶」に似て、長く姿をとどめたりしないと知りながら、その場に居合わせないことに耐えられなかったためだ。様々な疑問符すら、例えば、第1部、舞台前景を上手からゆっくり移動して下手袖に消えた吉崎裕哉が、間髪を容れず、舞台下手奥に姿を現してしまう様に虚を突かれたなら、もうどうでも良くなりはしなかったか。加えて、あっけらかんと、或いは、しれっと舞台上を片付けていく舞踊家たちによる大胆不敵な明転が畳み掛ける。目に徹すること。物語と抽象、更には、容易に一括りにし難い要素が嘘のように呆気なく身の裡に沁み込んでくる感覚こそ、今作の醍醐味。ただ観ていれば良いのだ。いかに頭が疑問符を生成しようとも、豊かな視覚体験を取り込む両の眼は簡単に足を攫われたりはしない。第2部冒頭、アウトフォーカスで濃密に絡む井関佐和子と中川賢。互いに相手を対象として視認しないのは、別々の身体にも拘わらず、自らの存立に相手の身体为重みが不可欠なさまを可視化して余りある。では、互いに目配せを欠いたような第1部と第2部はどうか。混沌とした時空、仮面にさえ表情を感じさせ、不思議な世界を立ち上げた身体と、切り替わる音楽と照明に合わせて、様々な舞踊言語を繰り返し続けた身体。並置の刺激、同時に無化される隔たり。ある日のアフタートーク、「第2部」を独立させて大人数で踊るのも観たいとの声。確かにそんなのも観てみたいと

思うが、あの「第2部」の形で踊られた『passacaglia』であってこそ、舞踊の懐の深さを突きつけられ、超えていく視覚体験に酔い得たことにも疑いの余地はない。金森種の計算にしてやられるのは実に心地よい。

下村 伸(新潟市)

『マッチ売りの話』との出会い

ひとつの作品を複数回観るということ。回数を重ねるごとに新しい発見があったり、その日の客席の状態で舞台の様子が変化するのを肌で感じたり、時には初回には気付かなかったほころびを発見してしまうことも…。

『マッチ売りの話』も複数回観ましたが、それは今までの鑑賞経験とは大きく異なる印象を私に残す公演となりました。

いつも初回鑑賞時パンフは事前に読まず、自分なりの第1印象を大切にしています。にもかかわらず、『マッチ売りの話』は何故か、パンフの登場人物に関する説明を読んでしまい、鑑賞中はそれを反芻、脳内に「?」の大洪水。鑑賞後は作品から拒否されているようにさえ感じました。

変化があったのは3回目の鑑賞時。全ての登場人物の背に重くて黒い石が乗っているのを発見しました、ただ一人精霊を除いて。その発見があっていかに『マッチ売りの話』は身近に感じられる作品になったのです。理解できる、できないではなく、感じられる作品。

4回目でいかに精霊の存在が、私の中で大きくクローズアップされることになりました。とりわけ舞台半ばに窓に映るその姿は心に深く残りました。

精霊の存在は救いなのでしょう? その答えを出すことは今もできていません。でも、あの作品に彼女は不可欠の存在、そんなふうに感じています。

公演が終わってしばらくして気付きました。それは、『マッチ売りの話』は、観客一人一人との対話を求めている作品だということ。少なくとも私にとってはそんな存在です。この作品の鑑賞中、観客席の雰囲気を意識することはありませんでした。後で感想を語り合うことはできるけれど、鑑賞中は1対1。『マッチ売りの話』は私にとって読書のような体験をもたらしました。

改めて不思議な作品、不思議な鑑賞体験だったと思っています。

岩沢美子(横浜市)

混乱する時代のNoism作品

『passacaglia』はこれぞNoismという複雑難解な世界を堪能し、『マッチ売りの話』はとにかく冷たく今までで一番怖かった。これまでの作品は難解でも暗くて悲しくても何からカタルシスがあったと思うのですが、最近ではクオリティの高さや美しさは落ちていけないけど、出口のない底無しの怖さや閉塞感に覆われて、それは時代の混乱と金森さんの苦悩が表れているのかなと思うのですが…。

磯部直子(新潟市)

夢を追いかけて

Noismを初めて観てから、早6年ほど経つ。それまで、20年近くバレエを観てきた私にとっては、舞踊言語が広がった瞬間だった。振り返ると、初めて金森種さんのお名前を目にしたのは、小学生の時、夢中で読んでいたダンス雑誌。それからNHKでアンコール放映されたトップランナー、金森さんが表紙を飾ったAERAを高校の図書館で貰い、意気揚々と帰宅した思い出もある…それから随分時間は空いたが、2010年の秋、バリ国際学生都市の日本館で、金森さんの講演を聴き、是非舞台を観た

いと思った。社会人となり、学生の時とは別の意味で夢を追いかけて、新潟、横浜や埼玉でNoismの舞台に足を運ぶようになった。劇場へ行く日はどこか心躍り、幕が開くのが待ちきれない。

好きな作品をあげようとなると、一言では言いきれないけれど、私はバレエファンであるので、バレエの要素がある、Noismが大好き。昨年の「ラ・バヤデール」の影の王国は本当に幻想的で、アラバスクもとにかく美しく、バレエ以上のバレエ、古典だと大大感動。また、パッサカリアが奏でられる中でのNoismもいつまでも観ていた。最新作での井関佐和子さんの精霊をみてみると、Noismの「ジゼル」を観たいなんて…

これからも、新潟から様々なNoismを発信してほしい。私は、舞台を観ることで夢を見続けたい。

市川真理子(千葉市)

【批評】

考察『マッチ売りの話』

この度、こちらに寄稿させて頂く機会を頂き、感謝申し上げます。さらに私のわがままを聞き入れて頂き、通常のレビューではなく「鑑賞者の中で起きている作品イメージ受容と展開のプロセス」に関する考察を執筆させて頂くこととなりました。『マッチ売りの話』+『passacaglia』という2つで1つの作品に対して『マッチ売りの話』に偏ってしまうことも最初にお詫びしたいと思います。

本作はアンデルセン「マッチ売りの少女」+別役実「マッチ売りの少女」という2つを原案としたオリジナルな物語舞踊で、近代童話劇シリーズの2作品目。雪降る街角でマッチを売りながら擦ったマッチの灯りで自分のスカートの中を見せる娼婦(47歳)、弱者として迫害され続ける少女(7歳)、自らを娘だと名乗って老夫婦の家に転がりこむ女(27歳)が軸となって物語が進んでいく。舞踊としてこの作品のさまざまな要素を繋ぐ1本の糸として、精霊(井関佐和子)が描かれるが、暗転の舞台上ゆっくりと両腕をあげていく厳かで輝くような美しさは、これから展開される不条理を包み込み、その先にある光(『passacaglia』)へと物語を繋いでいく存在だった。今回は少女(浅海侑加)が終盤に見せた「これまで見たことのない少女の姿」から、鑑賞者のイメージ受容と展開のプロセスについて考察してみたい。

原案のマッチ売りの少女では、少女は寒さの中でマッチを擦りながら幸福な自分を思い描きながら昇天していくが、本作品では立ちあがり上着を脱いだ少女の躰には爆弾がぐるりと巻き付けられていた(このシーンで多くの観客は大きな衝撃を受けるのではないかと思う)。不条理ながらも、非日常という枠組みの中で作品を見ている安逸さに、突然現実的な危機のイメージを突き付けられ、非日常の枠組みが壊された観客たち。私もこのシーンでフリーズ状態になった。ただ、ここで止まることは作品の求めていいことではないと想像力を奮い立たせた。「テロと切り離してみたらどう感じる?」「この爆弾って何をやるもの?」「少女の立ち姿が格好良く感じるのはどうして?」自問自答していくと、少女が闘うために立ち上がった姿に共感する自分がいた。だが、すぐその後ハッとする。「…私、テロリストに共感した?!」私は期せずして、テロリスト側の視点で世界を見る瞬間を感じて蒼白となった。しかしこの体験から現実と非現実の両方が繋がる感覚を得たように思う。

本作は非常に強い社会性を織り込んだ作品である。採用されたイメージもストレートであるため、観客の動揺も推測される。しかし、観客である私たちはそこから前に進むことも可能だと実感出来た。鑑賞をする中でガツンとやられてしまっても、私たちは恐れず想像力を手に作品と対峙していきたいと思う。その後にはこれまでは違う世界がきっと広がるだろう。鑑賞の醍醐味は、ここにあるといってもいいのだ。

亀田恵子(Arts&Theatre→Literacy)